

宮城県のスズメ

第 2 号

群れの分布と頭数

昭和62年3月

宮城のスズメ調査会

群れの分布と頭数

宮城教育大学 伊沢紘生
石巻市万石浦小学校 遠藤純二

I. はじめに

巨視的に見れば、ニホンサルは、北海道と沖縄をのぞいて、北は青森県下北半島から南は鹿児島県屋久島まで、日本列島のほぼ全域に分布している。しかし、たとえば東北地方にかぎっても、もう少し詳しく見れば、その北部、青森県の下北半島、津軽半島、白神山地に三つの生息域があるほかは、それより南、秋田県、岩手県、山形県にかけてが分布の大きな空白地帯となっていることがわかる。

かつて東北の山野に広く生息していたはずのかれらは、明治中期に狩猟用の銃器が普及して以来、機械化による森林の大面積伐採がおこなわれるようになった戦後の昭和30年代までに、多くの地域で次第に姿を消していったにちがいない。そして、おそらく宮城県も、そういった時代の流れの中で、けっして例外的な存在ではありえなかつただろう。

私たちは県下のサルが今日までにたどった歴史を可能なかぎり明らかにしたいと考えている。それは、野生ニホンサルの将来のありようを展望し、自然の貴重な文化財であり、かつ自然教育のかけがえのない教材として、次の世代に正しく引き継いでいく保護の方策を見出したいと願っているからだ。

それにはまず、現在のサルの生息状況を正確に把握することから始めなければならない。ここに報告するのは、私たちが1982年以来すすめている現地調査や、その過程で入手した各種の情報や、昨年各市町村の教育委員会にたいしておこなったアンケート調査などにもとづいて、今日までに把握できた県下におけるサルの生息の実態についてである。

ところで、宮城県には、かつて奥羽山脈の東斜面と北上高地一帯に、ニホンサルの二大生息域のあったことが、アンケート調査の結果だけからでも明らかである(伊沢・遠藤、1987)。そして両地域で、いくつもの群れが北から南へ連続的に分布し、奥羽山脈では、さらに北の、秋田県と岩手県にまたがる大薮山や焼石岳などの山系へ、南は板谷峠を越え

て福島県と山形県へ裾野を広げる吾妻山系へと、また、鍋越峠や関山峠、笹谷峠、金山峠など標高の低いところを通して西、山形県側の同山脈西斜面へと、連続分布していた。一方北上高地では、南端の牡鹿半島や金華山から、北は岩手県側の北上川中流域や五葉山へと、同様に連続分布していた。そしてこの二大生息域は、県北部のどこかで連結していた可能性も残されている。このような群れの連続分布こそ、ニホンザルという種の、日本列島における正常な存在様式であることは疑いない（Kawanaka, 1973, 上原1973, など）。

しかし、残念ながら現在では、上記二大生息域について、奥羽山脈東斜面では大倉山・鬢櫛山一帯、船形山系、面白山・大東岳山系、七ヶ宿地域だけに、北上高地では、内陸部では完全に姿を消して、南端の島金華山だけに、群れが分布している。以下に、それぞれの地域ごとに詳しく検討することにしたい。

Ⅱ．奥羽山脈東斜面について

1．大倉山・鬢櫛山一帯

この地域で私たちはまだ現地調査をおこなっていないが、岸田（1953）や環境庁（1981）の報告では群れが生息していたし、アンケート調査でも群れの生息が報告されている。

アンケートによれば、生息地は宮崎町寒風沢の西方にある大倉山と鬢櫛山の一帯で、群れの数は2群、それぞれの個体数は8～12頭および2～3頭である。1984年9月には集落に近い所にも現れたようだ。

これだけの情報から突っ込んだ検討を加えるのはむずかしいが、私たちのこれまでの青森県下北半島や石川県白山での調査、および長野県志賀高原などで実施された他の多くの調査からは、積雪地域にすむニホンザルの群れの遊動域は5～30Km²と広いこと、群れの個体数はおおよそ30～40頭で、70頭を越える群れはごくまれなこと（伊沢, 1984b）、また、10頭前後という小さい群れも確認されていること（たとえば伊沢, 1986）、さらに、ニホンザルのオスはハナレザルとして1頭だけで行動する以外に、しばしば数頭のオス・グループをつくって行動するのが一般的であること、などから判断すれば、この地域に10頭前後の小群が1つと、2

～3頭で行動するオス・グループがいるのではないかとの推定が成り立つ。

ただ、この周辺地域で群れの生息の情報がまったくないことから、たとえ2群ないしそれ以上が生息しているとしても、他地域からは孤立したポピュレーションであることはほぼ確実であり、群れの保護の問題を含め、早急な調査が望まれる地域である。

2. 船形山系

この地域に関しても、私たちは、まだ現地調査をおこなっていないが、岸田(1953)および環境庁(1981)によれば、当時群れが生息していたし、アンケート調査でも、同山系北東部の小野田町側に群れが生息している。

群れの数や頭数についての詳しい情報は残念ながらない。ただ、先へのべた大倉山・鬢櫛山一带と同じく、群れが1つでなく、たとえば複数群いたとしても、ポピュレーションとしては孤立していると考えられる。

3. 面白山・大東岳山系

この地域に関しては、情報も豊富だし、私たちも奥新川や二口溪谷の群れを中心に、1982年以来現地調査を続けている。また、過去の長谷部(1923)、岸田(1953)、竹下(1964)、環境庁(1981)のいずれにも、群れの生息が報告されているし、もちろんアンケート調査でも生息の報告がある。過去から今日まで、この地域が、奥羽山脈におけるニホンザルの、一つの集中生息地域になっていることは明らかだ。

群れについて、北から順にみていくことにする。①アンケートに報告のある関山トンネル付近の群れは、国道48号線沿いでドライバーらによってもしばしば目撃されており、生息はまちがいないだろう。目撃した人たちの情報によると30～40頭の群れのようだ。

②、アンケートに報告のある熊沢林道の群れは、1982年にこの林道沿いでカモシカの調査をしていた鈴木和男氏(東北大学理学部研究生、私信)も目撃し、そのとき27頭をカウントしている。前述した積雪地域の群れの遊動域の広さからして、①の群れと同一である可能性を完全に否

定しきることはできないが、現時点までの情報から、たがいに独立した群れだろうと判断される。

③、これら2つの群れのほかに、広瀬川の支流大倉川流域の、大倉ダムから定義にかけて、別の1群が生息していることがアンケートの報告にあり、私たちもいくつか目撃情報を得ている。目撃されたサルの数からすれば、20頭ほどの小さい群れではないかと思われる。

④、作並温泉から国鉄仙山線奥新川駅一帯および高倉山にかけて生息する群れは、私たちの継続調査でかなり詳しくわかっている。群れの遊動域は約30Km²で、個体数はごく最近の1987年1月18日のカウントで83頭だった。頭数がこのように多いこともあって、群れがしばしば2つの、ときに3つの集団にわかれて遊動するのも観察されている(遠藤, 1985)。

⑤、アンケートにある高倉山の南、穴戸沢流域から秋保町本小屋にかけて生息する群れは、地元の人たちやハイカーらからの多くの情報があり、私たちも断片的ながら調査をおこなっていて、群れが二口谷(名取川上流)を左岸から右岸に渡っていくのも観察している。群れの個体数は1986年1月26日のカウントでは30頭だったが、観察条件の悪い場所で、数えた以外にも音声の数箇所から聞かれたことから、40~50頭ではないかと推定される。

⑥、その南、三方倉山から姉滝にかけてに、⑤とは別のもう1群の生息がアンケートでは報告されているが、上述したように、私たちの調査からは、姉滝に現れるのはおそらく⑤に記した群れと同一である。ただ、三方倉山から⑤の群れと遊動域を重複する形、でその南斜面一帯にもう1群が生息していることが、聞き込み調査からは推定される。群れの頭数等、詳細は不明である。

以上にのべたように、少なくとも6群が面白山・大東岳山系に連続して分布していることはほぼまちがいない。

このほかアンケート調査では、群れが生息するかもしれない地域として、上述した地域より北東部の泉ヶ岳と、南西部の笹谷峠および峨々温泉があげられている。そのうち泉ヶ岳一円は、登山者やハイカーらが年間を通して数多く訪れる地域であるにもかかわらず、生息するという確かな情報が得られていないことから、その可能性はうすいと考えられる。

一方笹谷峠および峨々温泉については、そのすぐ南にある刈田岳一円が、過去の調査のいずれでも群れの生息が報告されていることや、不確

実だが私たちが情報を得ていることから、群れの生息は否定できない。

4. セツ宿地域

セツ宿地域では、ここ数年、サルの農作物荒らしが社会問題になっており、住民による群れの目撃情報も多い。アンケートの報告では、約20頭の群れが2群生息する。

また、河北新報1986年10月26日の紙面には、地元の長山保一氏（湯原郵便局長）からの情報として、群れは大小4群、そのうち稲子地区の群れが50～60頭、福島市飯坂町茂庭地区から稲子地区にかけての群れが35～40頭、山形県境の鳩峰峠付近の群れが35～40頭で、さらにセツ宿高倉地区に6～7頭の小群が最近出現したことが記されている。

まだこの地域の現地調査をおこなえないことによるが、私たちの入手したいくつかの情報を加えても、上記2つの報告を整理して、この地域に生息する群れの数や個体数を推定するのは困難である。ただ、後者の報告にある数頭の小群は、群れの若いサルたちの一時的な分派行動、ないしオス・グループであると考えられないこともないだろうし、同じく後者の報告にある福島県茂庭地区からの群れを宮城県のスルにとりあえずふくめては考えないということにすれば、セツ宿地区には、60頭前後の群れと40頭前後の群れの2群が生息すると推定しうる。

本報告では残念ながらこれ以上の検討はできないが、この地域が前項で述べた面白山・大東岳山系とあわせ、県内のサルの分布のうち、奥羽山脈東斜面の2つの集中生息地域のひとつであることはまちがいない。しかも、県下で猿害がかなり深刻化している地域であり、すでに昨年には有害鳥獣駆除の許可もおりているサルたちであることを考慮すれば、この地域のサルの保護を念頭に入れた早急な実態調査が強く望まれる。

5. 栗駒山系

かつて栗駒山から神室山にかけての山麓に群れが生息していたことは、長谷部（1923）や岸田（1953）の報告から明らかだ。しかし、この一帯に現在も群れが生息する可能性は、アンケート調査からも、私たちの聞き込み調査からも、まったくない。また、赤間徹氏（東北大学農学部助

手、私信)によれば、この地域を冬期を中心に広く踏査し、詳しい聞き込み調査もあわせおこなったが、群れの生息を推定させる証拠はなにひとつ得られなかったという。

おそらく現在では、この地域に数頭のみハナレザルが徘徊するだけと考えられる。

Ⅲ. 北上高地について

1. 金華山

牡鹿町の金華山にサルが生息することは古くから知られており、また、長谷部(1923)、岸田(1953)、竹下(1964)、環境庁(1981)など、過去のいずれの調査でも報告されている。私たちも1982年以来、この島で集中的に調査をおこなってきた(伊沢 1984a, 1985, 佐藤 1987, など)。それによると、年ごとに推定された総個体数は、1982年が4群約250頭、1983年には分裂の結果1群増えて5群約270頭、1984年は5群約180頭、1985年が5群約200頭である。1984年に個体数が著しく減少しているのは、その年1月から4月にかけて異常気象に見舞われ、サルが大量死したためだ。なお、以上の頭数には、群れのサル以外に、オス・グループやハナレザルとして生活しているオスたちの推定頭数も含まれている。そして1987年3月の時点での頭数は、A群33頭、B₁群30頭、B₂群25頭、C群31頭、D群67頭、その他のオス約25頭で、合計211頭と計算される。

2. 牡鹿半島一帯および内陸地域

金華山のほかに、かつては牡鹿半島の牧ノ崎や雄勝町船越などにも群れが生息していたが(長谷部 1923)、現在それら海岸域、および内陸部のすべての地域について、群れの生息を推定する確かな情報はまったく得られていない。アンケートの報告でも同様である。

ただ、ハナレザルがそれらの地域のあちこちに出没していることは、アンケートの報告にもある。その一例として、石巻市周辺で、この5年間に私たちが入手し得たかぎりのハナレザルの出現年月と場所を、図1に示した。

群れとは独立に気ままに行動するオス・グループや、ハナレザルの正確な頭数を調べるのはきわめて困難だが、図1やアンケートの報告からは、おそらく毎年数頭は海岸域や内陸部一帯を徘徊していると推定される。

IV. 群れの分布について

以上、県下のニホンザルの歴史的な二大生息域のそれぞれについて、群れごとに、具体的に検討を加えてきた。たしかに、ある地域は非常に詳しく調べられているし、別の地域は推定の域を出なかった。このように、データの正確さに程度の差はかなりあるが、それらを取りあえず不問に伏し、各群れの遊動域を推定した上で地図上にプロットしたのが図2である。

この図と、アンケート調査結果の報告書(伊沢・遠藤,1987)の市町村単位の分布図とで、異なる結果にはなっていない。ただ、上述の報告書の分布図(報告書の図1)では、市町村単位で生息状況を示したため、ニホンザルがまだ県下の広域に分布しているかのような錯覚を与えてしまう危険性がなきにしもあらずだが、ここに示した図2のように、群れという単位で生息状況を見れば、かれらの生息する地域が県下できわめてかぎられている、ということがはっきりわかる。とくに奥羽山脈東斜面の生息域の北部では、群れがすでに孤立状態にある可能性がきわめて高い。

V. 個体数

前章の図2で見たように、県下に生息するサルの群れの数は、奥羽山系で11群、金華山で5群、合計で16群である。

つぎにこれら16群の総個体数を計算すると、現時点において、奥羽山系では、頭数が不明な群れを30頭と仮定し、推定頭数に幅があるものはその平均値で計算すると、11群で計410頭、金華山では5群186頭となる。そのほか、前述したように栗駒山系や石巻地区など、あちこちにハナレザルが出没しており、七ヶ宿地域ではオス・グループの存在も推定されたことなどから、それらを合計すると約15頭が群れ以外にいることにな

る。金華山についてはそのようなオスザルの推定頭数は25頭である。したがって、群れの総個体数596頭に、これらオスの総数40頭を加えると、現在県下のサルの頭数は計636頭と計算される。

ところで、かつては猟師や林業関係者などわずかな人たちがときたまにしか訪れなかった奥山に、今日ではいたるところ林道や観光道路が通り、観光開発も進んで、釣人や山菜取りやハイカーらをはじめ、多くの人々が頻繁に訪れており、また奥山の森林伐採でサルが里山に追い出されるようになったこともあって、サルの情報は著しく増大していることが当然予測される。

それにもかかわらず、たとえば岸田（1953）が推定した県内のサルの総個体数1065頭や、竹下（1964）が回収率が65.1%と低いアンケートの報告をもとに積算した840頭に比べても、現在が636頭だというのは、宮城県の野生ニホンザルの将来がけっして明るくないことをはっきり物語っているといえる。

VI. おわりに

本報告では、現地調査をおこなえないままに、推定にたよらざるを得なかった地域がいくつかあった。今後、それらの地域での生態調査をできるかぎり実施して、より正確なデータの上に、改めて群れの分布や個体数について報告する機会を持ちたいと考えている。

上述したそれぞれの地域で、あるいはそれ以外の地域で、サルに関する詳しい資料をお持ちの方があれば、私たちに御連絡いただければ幸いである。

謝辞

本報告書を作成するにあたって、その基礎となった現地調査では、宮城町奥新川の日高行男氏、故日高きよゑ氏、宮城町作並の横田菊江氏、金華山黄金山神社の奥海睦宮司および職員の方々をはじめ、じつに多くの方々のお世話になった。アンケート調査では、県下の全市町村の教育委員会の方々、およびその際資料の収集にあたられた多数の方々に御協力いただいた。また、東北大学の赤間徹氏、鈴木和男氏からは貴重な資料

の提供を受けたし、その他多くの方々からさまざまな情報の提供を受けた。宮城教育大学第29合同研究室の学生および卒業生諸氏からは、現地調査のさいのさまざまな御協力や、未発表の資料の提供を受けたし、本報告書の作成にも御尽力いただいた。

以上すべての方々に深甚なる感謝の意を表する次第である。

引用文献

伊沢紘生 (1984. a)

金華山島のニホンザルの生態学的研究・第一報

「宮城教育大学紀要」No.18

伊沢紘生 (1984. b)

白山地域における野生ニホンザルの群れの分裂とその生態学的意味

「石川県白山自然保護センター研究報告」Vol.10

伊沢紘生 (1985)

金華山島のニホンザルと自然

「東北の自然」No.11

伊沢紘生 (1986)

下北のサル・1985年の調査結果

「1985年度協野沢野猿調査報告書」

伊沢紘生, 遠藤純二 (1987)

「宮城県のニホンザル I. アンケートによるサルの分布と民俗」

宮城のサル調査会

上原重男 (1973)

「食性からみた野生ニホンザルの適応に関する生物地理学的研究

— ニホンザルの分布がたどった歴史を再構成するためのひとつの試み」

京都大学大学院理学研究科修士論文

遠藤純二 (1985)

宮城県面白山山麓の野生ニホンザル

「東北の自然」No.7

Kawanaka, K. (1973)

Intertroop relationship among Japanese Monkeys.
「Primates」Vol.14 (2・3)

環境庁 (1981)

「動植物分布図・宮城県」 環境庁

岸田久吉 (1953)

代表的林棲哺乳動物ニホンザル調査報告
「鳥獣調査報告」No.14

佐藤静枝 (1987)

「野生ニホンザルの交尾期とメス間の毛づくろい行動の変化」
山形大学大学院理学研究科修士論文

竹下完 (1964)

野生ニホンザルの分布及びポピュレーション (下)
— アンケート調査による —
「野猿」No.20・21.

なお本文中に長谷部 (1923) とあるのは、長谷部言人 (当時帝国大学医学部教授) の収集した資料をまとめた岩野泰三 (1974)、ニホンザルの分布、「にほんざる」No.1, からの引用であることをおことわりしておく。

図1. 石巻市周辺でのハナレザルの目撃地点



地点名	場所	目撃年月
A	北上町大指	1986.12
B	北上町白浜	1983.?
C	河北町針岡	1982.4
		1983.4~7
		1984.5
D	河北町上品山	1985.3
E	石巻市祝田	1986.7
F	石巻市沢田	1985.8
G	女川町浦宿	1985.10
H	女川町高白	1984.5

図2. 宮城県における群れの分布

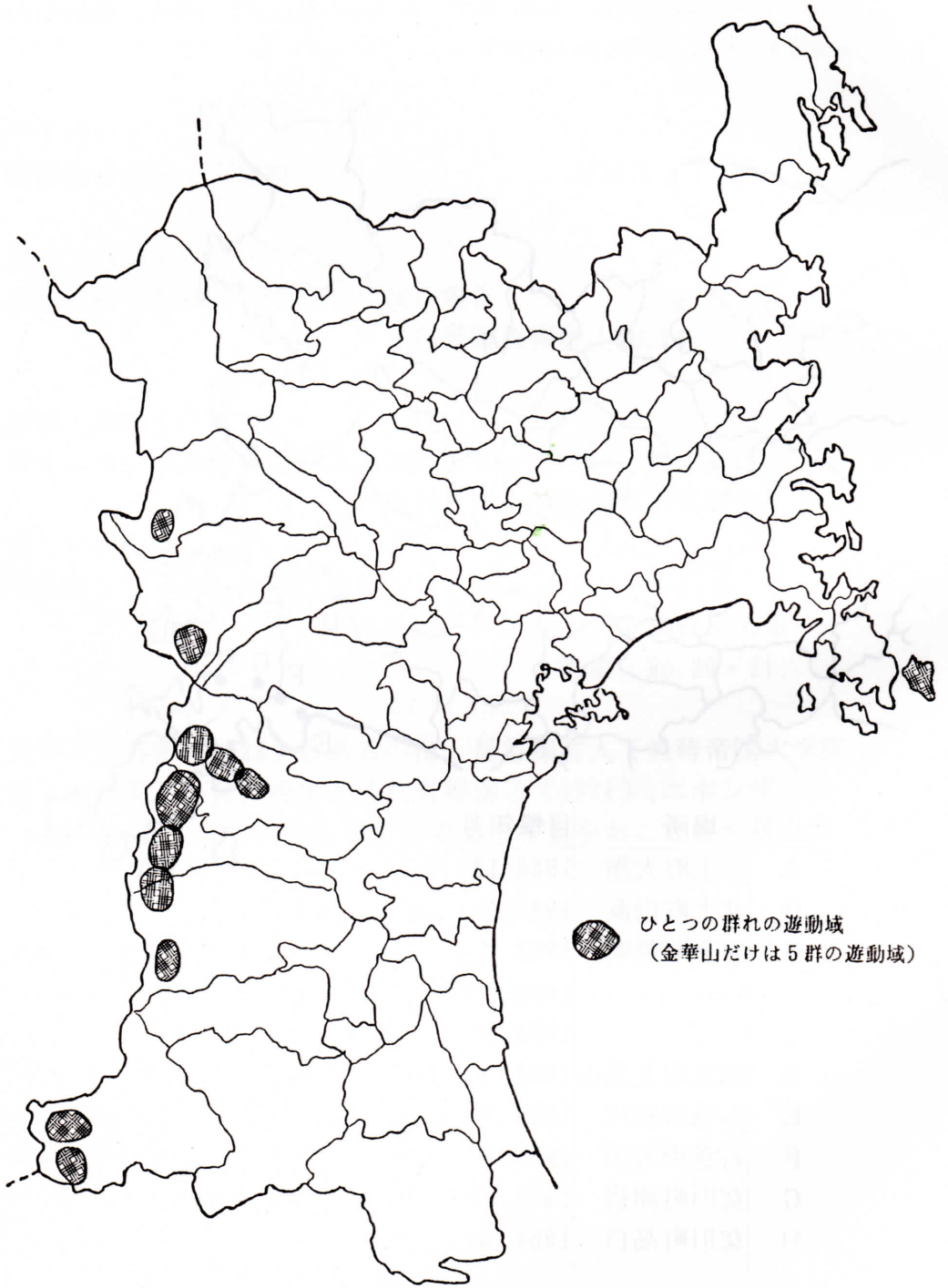


表 紙 題 字

宮城のサル調査会顧問 加藤睦奥雄筆